

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520084

研究課題名（和文） 東アジア三国における近代的「民族」概念の創出と「民族主義」創成に関する比較研究

研究課題名（英文） Comparative Study of the Invention of the “Nation” Concept and Creation of the “Nationalism” Ideology in Three East Asian Countries

研究代表者

佐々 充昭（SASSA MITSUAKI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：50411137

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末から20世紀初にかけて刊行された日本・中国・朝鮮の書籍類を対象に、「民族」に関連する用語がどのような概念として使用されているのか比較しながら、東アジア三国における「民族主義」言説の形成過程について明らかにした。今まで一国史の観点から個別に考察されてきた、日本・中国・朝鮮における「民族主義」創成の問題を、広く「東アジア」という枠組みの中で相互関連的に分析することにより、東アジア近代史像の再構築を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies how the “nationalism” ideology originated in three East Asian countries—Japan, China, and Korea—and compares the acceptance of the term “nationalism” in conjunction with the “nation” concept in the books of these countries that were published at the end of 19th century through the beginning of the 20th century. Until now, the subject of the creation of a “nationalism” ideology in East Asian countries had been considered from the viewpoint of the national history of each country individually. However, in this study, by examining the subject within the framework of “East Asia” interrelatedness, the researcher rebuilds the historical understanding of Modern East Asian history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、思想史

キーワード：東アジア、民族主義、帝国主義、国粋主義、民族魂（民族精神）、国家思想、黄帝子孫、檀君子孫

### 1. 研究開始当初の背景

#### （1）本研究に関連する先行研究の動向

戦後の歴史研究では、東アジアの近代化過

程について、「侵略と抵抗」という二項対立的な観点から、帝国主義国として侵略的膨脹を企てた日本が、中国や朝鮮の内在的な近代

化を阻害していく過程と見なす場合が多かった。このような場合、「民族」は自然発生的に生じた集団として本質主義的に規定され、特に中国と朝鮮で展開された「民族主義」運動を日本帝国主義に対抗するための抵抗運動として内発的・自生的に発生したものと見なす傾向があった。

しかし、近年では、このような一国史の立場を超えて、「東アジア」における「近代(modern)」への同時代的な投企に着目する研究が数多く行われている。その一つに、「国民国家」論の立場からの研究がある。代表的なものとして、西川長夫の一連の研究や、山室信一(『思想課題としてのアジア - 基軸・連鎖・投企』岩波書店、2001年)の研究等があげられる。一方、植民地帝国日本によるアジアの文化統合という観点からの研究が行われている。これに関しては、駒込武(『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年)の先駆的研究の後、特に朝鮮史の分野で「植民地近代(Colonial Modernity)」(並木真人、松本武祝、尹海東など)や「植民地朝鮮/帝国日本の文化連環」(趙寛子)に関する研究が行われている。これら「東アジア」という分析枠組みを問題視する研究では、B.アンダーソンやA.ゲルナーなどの近代主義的なネイション論の立場から、「民族」概念は近代の所産であり、「民族主義」言説それ自体も、帝国と被支配国の植民地支配構造の中で親密に織りなされて形成・発展させられたものであったことが指摘されている。

## (2) 着想に至った経緯と本研究の位置づけ

研究代表者は、朝鮮近代における民族主義形成を主題として「韓末における『強権』的社会進化論の展開 梁啓超と朝鮮愛国啓蒙運動」(『朝鮮史研究会論文集』第40集、2002年)や、「植民地期朝鮮における檀君系教団の分裂・提携・統合運動に関する研究」(平成18~20年度基盤研究C)を行った。これらの研究を通じて、西洋の「ネイション」をもとに創出された日本の「民族」概念が、近代国民国家の建設構想を通じて中国や朝鮮にも伝播していった事実を明らかにした。この問題に関しては、中国史の分野においても、狭間直樹(『梁啓超 - 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年)や、王柯(『20世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、2006年)さらに西村成雄・坂本ひろ子・吉澤誠一郎・銭国紅などの研究の中で近年盛んに論じられている。

一方、朝鮮近代史の分野では、戦前の日本人研究者が行った他律性・停滞史観の克服を課題としたために、1920年代以降の植民地期における文化ナショナリズム研究など一部の研究を除いては、欧米や日本からの近代思想の受容の側面はあまり注目されず、むしろ

る民衆史の土台に立った、自律的で抵抗主義的な「民族主義」研究が志向される傾向にある。本研究では、朝鮮近代史の領域に対しても、日本・中国・朝鮮における「民族」概念の創出とそれともなう「民族主義」の創成という相互比較的な観点から分析を試みる。

## 2. 研究の目的

本研究は、「ネイション」を近代の所産とみなす近代主義的なナショナリズム論の立場から、東アジア三国における近代的な「民族」概念の創出と、それに伴う「民族主義」の創成過程について明らかにすることを目的とする。特に本研究では、19世紀末から20世紀初にかけて刊行された日本・中国・朝鮮の書籍類を考察対象として、「民族」および「民族主義」に関連する用語がどのような概念として使用されているのか比較研究を行う。今まで一国史の観点から考察されてきた、日本・中国・朝鮮における「民族主義」形成の問題を、広く「東アジア」という枠組みの中で相互関連的に分析することにより、東アジア近代史像の再構築を試みる。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究方法・計画の概要

本研究で扱う地域は、日本・中国・朝鮮の三国であり、研究対象とする時期は、西洋のネイション(nation)の翻訳語として「民族」という語彙が案出され定着していった1880年代から1910年頃までとする。日本・中国・韓国での現地調査を行いながら、この時期に刊行された日本語・中国語・朝鮮語の各種史料を収集・調査する。それらの史料の中から「民族」という語句が使われた用例を時系列的に抜粋し、それらが各地域においてどのような概念として使用されているのか比較・分析する。分析に際しては、東アジア近代における「民族」概念の創出とともに唱導された、「国家思想」、「民族主義」、「国粹主義」という用語に着目する。日本・中国・朝鮮においてこれらの用語がどのような概念として使用されたのか比較・分析することにより、東アジア三国における「民族」概念および「民族主義」創成に関する相互関連性について具体的に明らかにする。

### (2) 調査対象とする史料について

朝鮮については、近代化政策が本格化した1895年甲午改革から1910年の韓国併合までの時期を対象とする。『皇城新聞』『大韓毎日申報』などの新聞や、愛国啓蒙運動期に刊行された雑誌・単行本を研究対象とする。留日朝鮮人留学生が発行した機関誌である、『親睦会会報』『太極学報』『光武学会』『共修会』『同寅学報』『大韓留学生会学報』『大韓興学报』なども考察対象に含む。

中国については、1895年の戊戌政変から1911年の辛亥革命までに刊行された新聞・雑誌・単行本を研究対象とする。特に留日中国人留学生が1900年頃から1910年にかけて発行した機関誌、具体的には、『訳書彙編』『遊学訳編』や、中国の各省・各地域を単位に刊行された雑誌や学界別の専門誌（『湖北学生界』『漢声』『直説』『浙江潮』『江蘇』『雲南』『四川』『政法学報』『東京留学生界紀実』『二十世紀之支那』『漢幟』『漢政雑誌』『新訳界』『憲法新誌』等）さらに、梁啓超の『新民叢報』や、革命派系の雑誌（『民報』『国粹学報』等）について調査する。

日本語文献については、中国語および朝鮮語の翻訳書の典拠となった図書（新聞・雑誌・専門学術書・教科書類）を研究対象とする。具体的には、政教社系の『日本』『日本人』（後に『日本及日本人』）民友社系の『国民之友』『国民新聞』、総合雑誌『太陽』、法学専門雑誌『独逸協会雑誌』『国家学会雑誌』等について調査する。調査に際しては、日本語図書が参考・引用した欧米の学術図書についても精査する。この作業を通じて、どのような西洋図書が日本語に翻訳され、それらがどのような経路を通じて、中国や朝鮮に伝播していったのか具体的に明らかにする。

#### 4. 研究成果（本研究において以下のことを明らかにした。）

##### （1）東アジア三国における「民族」概念の創出過程について - 「国家思想」を中心に

「民族」という用語は、日本において欧米語の翻訳用語として考案された後、それが中国や朝鮮へ伝播していったものである。この用語は最初、ブルンチュリ（Bluntschli）の国家学説を紹介する過程で、日本のドイツ法学者たちによって案出された。ブルンチュリの国家学説は、自然発生的な共同体である「Nation ナチオン」が政治的な共同意志をもつ「Volk フォルク」になるというものであり、「Nation」が「族民」、「Volk」が「国民」と翻訳された。1887年にブルンチュリの国家論を訳出した加藤弘之「族民的の建国並びに族民主義」（『独逸学協会雑誌』第40・41号）で「族民」なる用語が使用された後、平田東助や平塚定二郎が翻訳した『国家論』（春陽堂、1889年）でも「族民」という訳語が使用された。その一方で、政教社系の人士たちは、ドイツ学者たちの翻訳語を参照しながらも、1888年に創刊された雑誌『日本人』などで、英語の「Nation」に対する翻訳語として「民族」なる語彙を使用していった。その後、日本では「民族」という用語と概念が、言論思想界の中で定着していった。

中国で「民族」という用語を初めて使用したのは梁啓超であった。戊戌政変の後、日本へ亡命した梁啓超は、日本書の書評・紹介と

して1899年に「東籍月旦」を著したが、この中で「民族」という日本で考案された翻訳用語がそのまま使用された。その後、梁啓超は、当時日本で導入されていたドイツの法学思想を「国家学思想」と総称し、その説明として「民族」という用語と概念を中国へ紹介していった。梁啓超が「民族」について最初に詳論した論説「国家思想變遷異同論」（1901年）も、ブルンチュリの国家学説に依拠して書かれたものであった。この論説の中で、彼は「中国民族」という語を使用し、さらに1902年には「中華民族」という概念を使用した。

その一方で、留日中国人留学生の翻訳書においても「民族」という用語と概念が紹介された。清末当時、数多くの中国人が日本へ留学した。彼らは日本語に翻訳された西洋の学術図書を中国語に翻訳する形で、西洋の近代思想を中国に紹介していった。その際、ドイツの法学思想に関する日本語文献を翻訳する過程で「民族」（「族民」）という用語が紹介された。留日留学生が刊行した学会誌の先駆けとなった『訳書彙編』第1期（1900年）や『遊学訳篇』第3冊（1902年）の中で、すでに「民族」という用語が多数使用されている。その他、留学生たちが刊行した数多くの雑誌・単行本の中でも「民族」なる用語と概念が盛んに使用された。

朝鮮においては、日本や中国で刊行された書籍や新聞記事の紹介を通じて、「民族」という用語が普及していった。朝鮮において「民族」という用語が大々的に紹介され定着したのは、1905年から1910年の愛国啓蒙運動期を通じてであった。特に日本に留学した朝鮮人留学生たちが、日本語の西洋近代学術書を朝鮮語に重訳して刊行していったが、それらを通じて「民族」という用語が紹介されていった。また、朝鮮では、梁啓超の論著（『飲冰室文集』など）が儒学的素養を有した知識人たちに好んで読まれた。梁啓超の論説記事が、朝鮮の学術雑誌の中で盛んに紹介される中で、「民族」という用語が広く朝鮮思想界に普及していった。その際、朝鮮の知識人たちは、西洋近代の法学政治思想を、梁啓超が名付けた名称にならい「国家思想」と称した。朝鮮で論じられた「国家思想」の内容は、当時の日本で流行していたドイツの近代法学思想（特に「国家学」分野のもの）とほぼ同一のものであった。

明治期の日本では、英仏流の人民主権にもとづく市民的な「民族」概念ではなく、ドイツ流の国家主権にもとづく人種的な「民族」概念が受容された。その後、ドイツ国家学と国体論とを接合させた日本的に歪曲化された「民族」概念が「国家思想」として中国や朝鮮に伝播していった。そのために、東アジア三国における「民族」観念は、人権意識や民主的公共性を排除した国家主義的な特徴

を共通に持つことになったのである。

## (2) 東アジア三国における「民族主義」言説の創成過程について

「民族」という用語の受容に伴い、東アジア三国では「民族主義」の言説が創出されていった。日本では、1887年にドイツ法学者の加藤弘之によってドイツ語「nationalität」の翻訳語として「族民主義」なる語が考案された(論説「族民的の建国並びに族民主義」1887年)。「nationalität」の概念は、日本の思想界に広く普及していったが、その際、「族民」が「民族」という用語に変えられたように、「民族主義」という用語が広く使用されていった。一方、政教社系の人士たちは、英語「nationality」の訳語として「国民主義」や「国粹」という訳語を案出していった。このように英仏学系学者とドイツ学系学者の翻訳用語の違いなどがみられながらも、日本では「民族主義」「国民主義」という用語が広く定着していった。さらに、日本では、日清戦争から日露戦争の時期にかけて、当時の欧米で盛んに議論されていた「帝国主義」に関する学説が日本語で翻訳・紹介された。米国のポール・ラインシュの著作を抄訳した『帝国主義論』(高田早苗訳、1901年)、米国のバルジエスの著作を抄訳した『政治学及比較憲法学(上下巻)』(高田早苗・吉田巳之助共訳、1901年)などがその嚆矢である。それらでは、欧米の学説にもとづきながら「民族帝国主義」の理論が詳述されている。また、それまで「平民主義」を説いていた民友社でも、日清戦争後の三国干渉を契機に「帝国主義」による「大日本膨張論」を提唱していった。浮田和民が民友社グループに同調し、同社発行の『国民の友』や『国民新聞』で欧米の「帝国主義」論を盛んに紹介し、『帝国主義と教育』(1901年)、『倫理的帝国主義』(1909年)などの著作を通じて、日本が「帝国主義」国家へ変容すべきことを説いた。

一方、中国でも、日本で案出された「民族主義」という用語が伝播し普及していった。当時の中国知識人たちは、清朝皇帝を中心に立憲君主国家を建設しようとする立憲派と、清朝を打倒し民主的な共和制国家を樹立しようとする革命派に分かれていた。これら二つのグループにおいて、「民族主義」の受容の仕方は大きく異なった。立憲派の中心人物として康有為や梁啓超があげられる。特に梁啓超は、当時の日本で議論されていた「民族主義」国家が「民族帝国主義」国家へ膨張するという国家発展論を中国語にいち早く翻訳・紹介した。その際、「中国は民族主義すらも未だ胚胎していない故に、民族帝国主義を移植するわけにはいかず、速やかに民族主義を養成すべき」とであると説いた(「国家変遷異同論」1901年)。また、梁啓超は、列強

が中国の分割統治(瓜分)を狙っている状況の中では、中国領内の全種族(漢・満・蒙・回・蔵など)が合一すべきであるとして「大民族主義」を唱え、立憲制を前提とする「中華民族主義」論を説いた。これに対して、革命派と留日留学生の多くは、満州族が主体の清朝政府を打倒し、民主的な共和政体を実現するために、漢族を中心とする「種族的民族主義」を唱導していった。当時、革命派の多くが清朝政府の弾圧を避けるために中国大陸から日本へ亡命していた。また、留日留学生たちの多くは、清朝の満州族統治から抑圧されていた中国南部の出身者であり、中国古来の古典文化に誇りをもつ知識人階層の漢族たちであった。そのために、留日留学生たちの多くは、革命派と合流して、清朝打倒と共和革命を目指す政治思想に賛同した。彼らは「排満興漢」のスローガンのもとに、満族と漢族との人種的差異を強調し、日本で紹介されていた種族的(エスニック)な「民族主義」概念を積極的に受容した。このような漢族の優位性を主張する「民族主義」論は、留日中国人留学生たちが刊行した雑誌や中国同盟会の機関誌であった『民報』の中で盛んに唱導された。

朝鮮においては、1905年から1910年の愛国啓蒙運動期において、梁啓超の論著や日本書籍の重訳本を通じて「民族主義」の用語や概念が受容された。朝鮮の場合においても、「民族主義」が「民族帝国主義」へ発展するという欧米の政治学説が紹介されたが、朝鮮は1905年以降日本の保護国支配を受けたために、「民族主義と民族帝国主義の対立」の側面を強調し、列強の「帝国主義」支配に対抗するための「民族主義」の創成を唱えていった。しかし、当時の朝鮮知識人たちが唱導した「民族主義」は、優勝劣敗と弱肉強食を生存競争の原理とする立場から、実力養成と自国の富強化を目指そうとしたものであり、列強の「帝国主義」膨張の侵略性を根本的に批判するようなものではなかった。しかし、日本の帝国主義支配が徐々に強まっていく中で、「帝国主義」がもつ非倫理性や暴力性という根本的問題を批判する論著も公刊されていった。例えば、卞榮晩は「帝国主義の警説」(『法政学会』第20号、1909年)、「帝国主義の性質」(『法政学会』第21号、1909年)、『二十世紀之大惨劇：帝国主義』(1908年)などで、「帝国主義」国が植民地に対して行使する野蛮な暴力を批判しながら、「帝国主義」に対抗するための「民族主義」の創成を訴えた。

## (3) 「国粹主義」運動に関する三カ国比較

東アジア三国における「民族」概念の創出は相互関連的に連鎖して行われたものであった。しかし、「民族主義」の展開について

は、自国固有の文化を保存・発揚する「国粹主義」の理念が提唱され、各国の政治状況の違いなどによって多様な発展様相を見せた。

日本では、明治 20 (1887) 年頃から政教社の志賀重昂や三宅雪嶺らの雑誌『日本人』や、陸羯南の新聞『日本』を中心に、「欧化主義」に対抗するものとして「国粹主義」運動が展開された。「国粹」は「nationality」の訳語として発案されたものであり(志賀重昂「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に撰定せざるべからず」『日本人』第 3 号、1888 年)、日本が生存していく道を「欧化」ではなく、自国固有の価値を発揮することに求めようとする時代状況の中で提唱された。その際、日本の「国粹主義」運動では、ナショナル・アイデンティティーに相当する民族固有文化の核として「民族魂」という概念が提示された。例えば三宅雪嶺は、日本の「国粹」を「武士道精神」の中に見出し、「愛国即ち愛皇室」を中核とする「日本魂/大和魂」を「国粹」の本質とみなした(「土族論」『日本人』第 39 号、1890 年)。一方、ドイツ法学者の穂積八束は、「国体」論の立場から、天皇の祖先である「天祖」が血族団体としての日本民族全体の先祖であるとし、日本民族は天照大御神の子孫である天皇を中心に統合された一大家族国家であるとする国家論を提唱した。また、1897 年には井上哲次郎・木村鷹太郎・湯本武比古らを中心に大日本協会が設立された。この団体は、天照大神を「国祖」として崇拜し、日本建国の精神を発揮する「日本主義」を宣揚した。この「日本主義」運動は、天照大神を国祖として崇拜する「新神道」を日本の「国教」にしようとする国民運動として展開した。

一方、中国では、康有為や梁啓超らが、立憲制の実現を目指して保皇運動を展開していった。彼らは、列強による中国の分割統治という危機的状況の中で、中国は統一された立憲君主国家として一つに団結しなければならないと考えた。特に康有為は、中国文化の精髓である儒教に国民統合の契機を見出し、孔子を儒教の教祖として位置づけ、儒教を孔教(孔子教)と称し、これを中国の国教とする運動を提唱していった。この孔教国教化運動は、西洋のキリスト教や日本の国家神道に対抗するためであったが、明治初期に日本で試みられた神道国教化政策に範をとったものでもあった。一方、梁啓超は、次第に康有為の思想からは一線を画すようになり、日本亡命後は中国固有の「民族魂」の発揚を提唱していった。梁啓超は、日本亡命直後に「国粹主義」を提唱した志賀重昂と面談した後、日本の武士道を中核とする大和魂や尚武精神・尊皇愛国の精神について中国語で紹介した。また、梁啓超は日本の「国粹主義」運動の中で論じられていた「民族魂」論

に啓発され、中国伝統文化の中の尚武精神を重んじた中国的な武士道として「中国魂」の存在を説いた(「中国積弱遡源論」1900 年、『中国之武士道』広智書局、1904 年など)。また、梁啓超は、「黄帝」が中国人全体の始祖であるとして、「黄帝の子孫」意識にもとづく「中華民族主義」を唱導した(「新民説」の諸論説など)。しかし、梁啓超の場合、清朝皇帝の権威を求心点とする立憲制にこだわり、満州族や漢族などすべての種族を統合する「大民族主義」を説いていった。

他方、これとは別の形の「国粹主義」が革命派や留日留学生らの中で提唱された。革命派人士や留日留学生たちも日本の「国粹主義」運動から影響を受け、「民族魂」論を唱導していった(例えば飛生「国魂篇」『浙江潮』第 2 期、壮游「国民新靈魂」『江蘇』第 5 期など)。彼らは「排満興漢」による共和革命を訴え、既存の文化的な「華夷」意識を「満族対漢族」という種族対立の構図に置き換えて、種族主義的な「国粹主義」論を展開した。

「排満興漢」と「国粹主義」を結合させた論説は、留日中国人留学生が刊行した雑誌の至る所に見いだせる。また、革命派・留日留学生の場合、「黄帝」を漢族の血縁の始祖であるとみなして、漢族主体の種族的な「国粹主義」を提唱した。彼らの論著では、漢民族の始祖としての「黄帝の子孫」意識が宣揚され、黄帝の誕生を起源とする「黄帝紀元」の使用や、「黄帝魂」なる用語も使用された(『黄帝魂出現』鏡今書局、1904 年など)。その後、劉師培・章炳麟・鄧実ら国学保存会会員らによって 1905 年に『国粹学報』が発刊された。本誌では、日本の「国粹保存旨義」の理念などが紹介される一方で、日本に対する強烈な対抗意識が見られた。また、本誌では、「国学」の重要性が指摘され、蒙古や満州族などの夷狄の学問ではなく、「黄帝堯舜禹湯文公孔子之学と漢・宋の学」や「経史六経」など漢族固有の伝統文化の回復と復権が説かれた(「国魂与国学」『国粹学報』第 6 期)。

朝鮮では、梁啓超の論著や日本に留学した朝鮮人留学生たちが日本語文献を翻訳した書籍から「国粹主義」が伝播していった。朝鮮においても、尚武精神にもとづく日本武士道の「大和魂/日本魂」論が紹介され、それに触発されて朝鮮固有の「民族魂」として「朝鮮魂」「大韓魂」「大韓精神」の発揚が訴えられた(崔錫夏「朝鮮魂」『太極学報』第 7 号、1906 年など)。また、新聞や各種の学会誌を通じて、「国粹主義」の理念が盛んに紹介された(李膺鐘「教育の主義」『畿湖興学会月報』第 11 号、1909 年など)。また、朝鮮における「国粹主義」論は、朝鮮の開国始祖である「檀君」を朝鮮民族全体の血縁の始祖とみなす一大家族国家論を生み出していった。「檀君の子孫」意識にもとづく「国粹主義」

論を唱導した代表的思想家が、申采浩と朴殷植であった。この二人の「国粹」に対する考え方は多少の違いが見られるが、朝鮮における二つの類型をなしている。朴殷植は、陽明学に関心を寄せた改革派儒林でもあり、朝鮮民族の中心点として「檀君」と「箕子」の双方をあげ、朝鮮民族は「檀君箕子の神聖後裔」であるとして「檀箕の子孫」意識を唱導した。さらに、「朝鮮魂」についても、義理・忠孝礼儀などの伝統的儒教文化を含めた上で「四千年の固有なる朝鮮魂」であるとした。一方、『大韓毎日申報』の主筆をつとめていた申采浩は、同紙に論説「国粹保存旨義」を掲載し（1908年8月12日付）「国粹主義」の理念を大々的に宣揚した。申采浩の場合、中国殷人の血統に繋がる箕子を排除し、檀君のみを民族の始祖とする完全なる「檀君の子孫」意識を提唱した。彼は、「檀君」を精神的求心点とする一大家族国家論を提唱しながら、愛国心を高めるために、檀君を基準とする「檀君紀元」の使用などを訴えた。このような「国粹主義」運動から、やがて檀君を精神的求心点とする朝鮮民族固有の「国教」として「檀君教」（後に大倭教と改称）という宗教団体が創設されていった。

以上、東アジア三国の「国粹主義」運動は、日本から中国・朝鮮に伝播したものであり、尚武精神を重視する「民族魂」の発揚、歴史上最古の神話的人物を「民族の血族的先祖」と見なす点、などの共通性が見られた。しかし、中国や朝鮮において唱導された「国粹主義」は、欧米列強や日本の帝国主義侵略に対抗するために唱えられたものであった。このように、東アジア三国で発生した「国粹主義」運動では、各国の政治状況を反映した独自の言説編成が行われ、相互に競合的なナショナリズム運動として展開された。

以上が、本研究を通じて明らかにした事実である。今回の研究期間中において、研究代表者は、主に中国「民族主義」運動の中で勃興した「国教」創設運動に関する研究成果を公表した。今後、本研究で得た資料をまとめながら、東アジア三国における「民族主義」創成に関する論文、特に三カ国の「国粹主義」の発揚に関する比較研究に関する論文を公表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

佐々充昭、「総督府朝鮮史編纂における檀君論争と李能和の朝鮮神教論」、『季刊日本思想史』（特集：植民地朝鮮にける歴史編纂「併合100年」からの照射）第76

号、2010年、204～224頁、査読無  
佐々充昭、「東アジア近代における孔教運動の展開 - 康有為と朝鮮人儒学者との交流を中心に」、『立命館文学』立命館大学人文学会、第626号、2012年、1497～1484頁、査読無  
佐々充昭、「朝鮮近代における白頭山神聖観念の形成 - 大倭教系言論人の活動を中心に」、『韓国朝鮮の文化と社会』第11号、韓国・朝鮮文化研究会、2012年、112～148頁、査読有

〔学会発表〕（計4件）

佐々充昭、「日本和韓国の新宗教研究」、華岩宗教学術講座第24回講演会、中国人民大学哲学学院「仏教と宗教学理論研究所」主催、2011年11月16日、場所：中国・北京

佐々充昭、「近代韓国孔教運動之展開」、国際儒学論壇2011（儒家的修身処世之道）中国人民大学・韓国高等教育財団主催、2011年11月3日、場所：中国・北京

佐々充昭、「韓国の新宗教と民族宗教」、中央民族大学哲学与宗教学学院學術講座講演会、中国中央民族大学哲学学院主催、2011年12月15日、場所：中国・北京

佐々充昭、「東亜三国的国教創設運動与儒教的近代宗教化」、2012東亜儒学国際學術研討会、中国上海師範大学哲学学院・国際儒学院主催、台湾師範大学国際僑教学院・韓国成均館大学儒教文化研究所共催、2012年9月15日、場所：中国・上海

〔図書〕（計1件）

佐々充昭、「間島地域 大倭教 初期活動 白峯集団 - 倍達民族史観 宣揚」、韓国学中央研究院「文化 宗教」研究所編『間島 韓人宗教』、韓国学中央研究院（韓国宗教学叢書10）、2010年、204～242頁、共著（韓国語）

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々 充昭 (SASSA MITSUAKI)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：50411137

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし